

○牛腸ヒロミ* 高木史恵* 小見山二郎** 長江美智子** 中島利誠***

(*聖徳栄養短大, **椋山女学園大, ***昭和女子大)

【目的】 太古からにおいては生物間のコミュニケーションの手段であった。においがどういふ働きをしているにせよ特定なにおいに特定の色が伴うことは、しばしば見られる。人のおいの感じ方に、被服、食品、住まい、環境などの色がどのように影響するかを調べることは興味ある課題である。本報告は10種のおいを6種の色に付けたサンプルを用い、女子大生のおいの感じ方が色によって違うことを明らかにする。

【方法】 官能評価は、10種のおい物質を6種のカラーブロード布に付けたサンプルを用い、各色について20代の女子学生7~10名を被験者として行った。SD評価法により、結果を因子分析し、抽出基準を固有値1.0以上として基本因子を抽出した。

【結果】 におい物質をしみ込ませた赤、黄、緑、青の4種の布の場合には、第1因子、快-不快感をはじめ、4つの因子が、紺と白では3因子が抽出された。10種のおいの因子得点を比較すると、例えば、第1因子では、オレンジ様香気のリモネンや柑橘系の香りであるシト랄が大きな値を示し、これらのにおいで布の色にかかわらず快適感が強く感じられている。しかし、 γ -デカラクトンは黄と紺の場合にのみ大きな値を示し、布の色によりにおいの感じ方が異なることを示した。このように官能評価で得られた結果を基に、においの感じ方に色がどのように影響するかを報告する。